020053-000-4

特59-291

日蓮上人御一代記

永田 文次郎／編

M19. 11

ABH-0253

特59 291

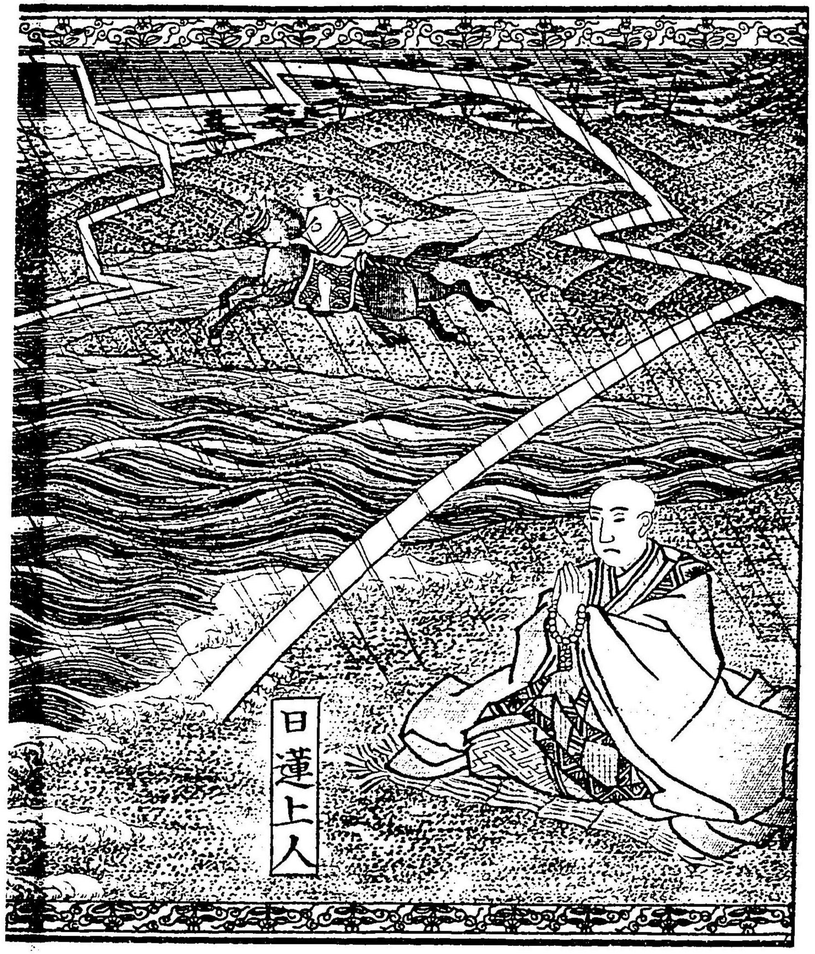
No 5263

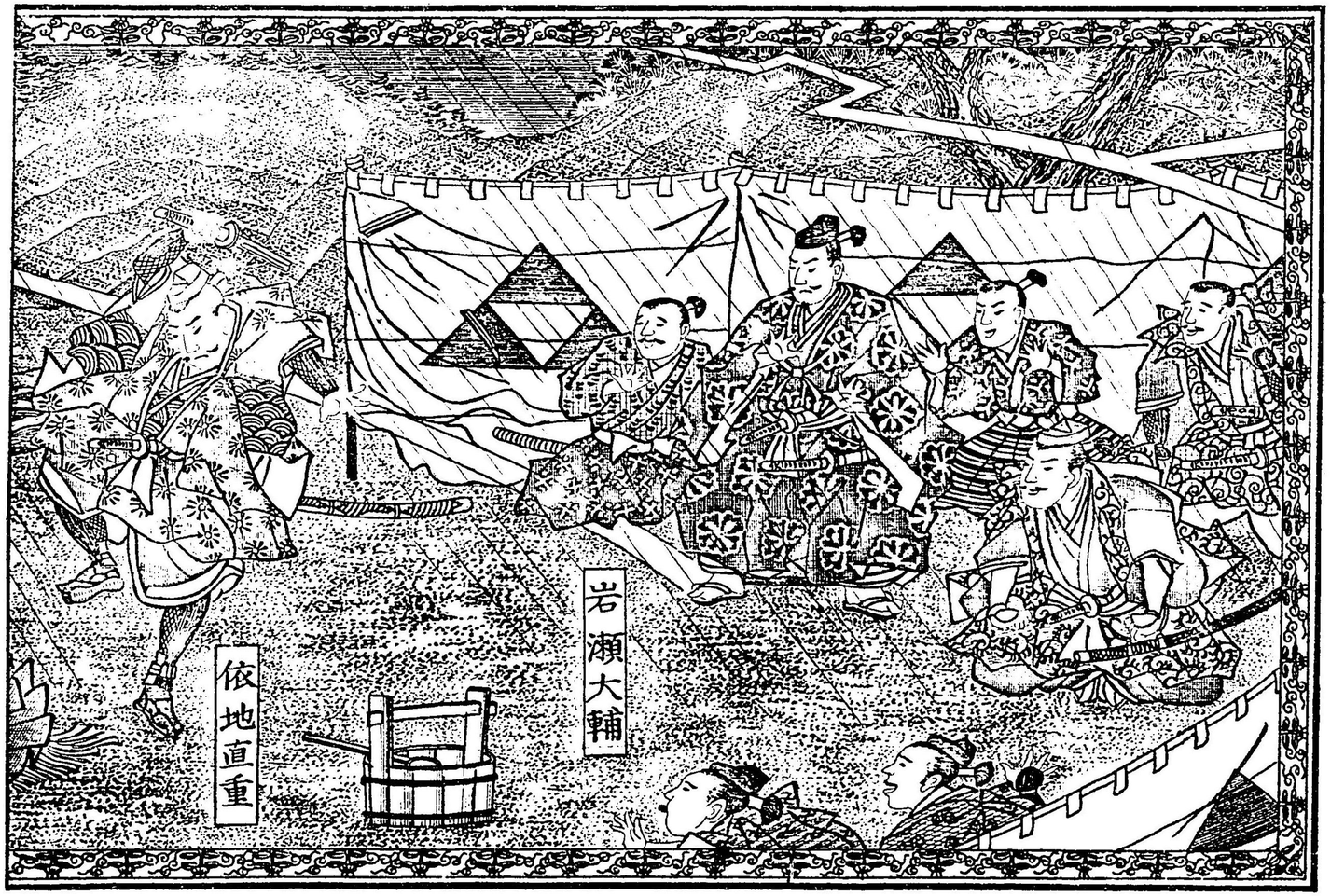
御一代記

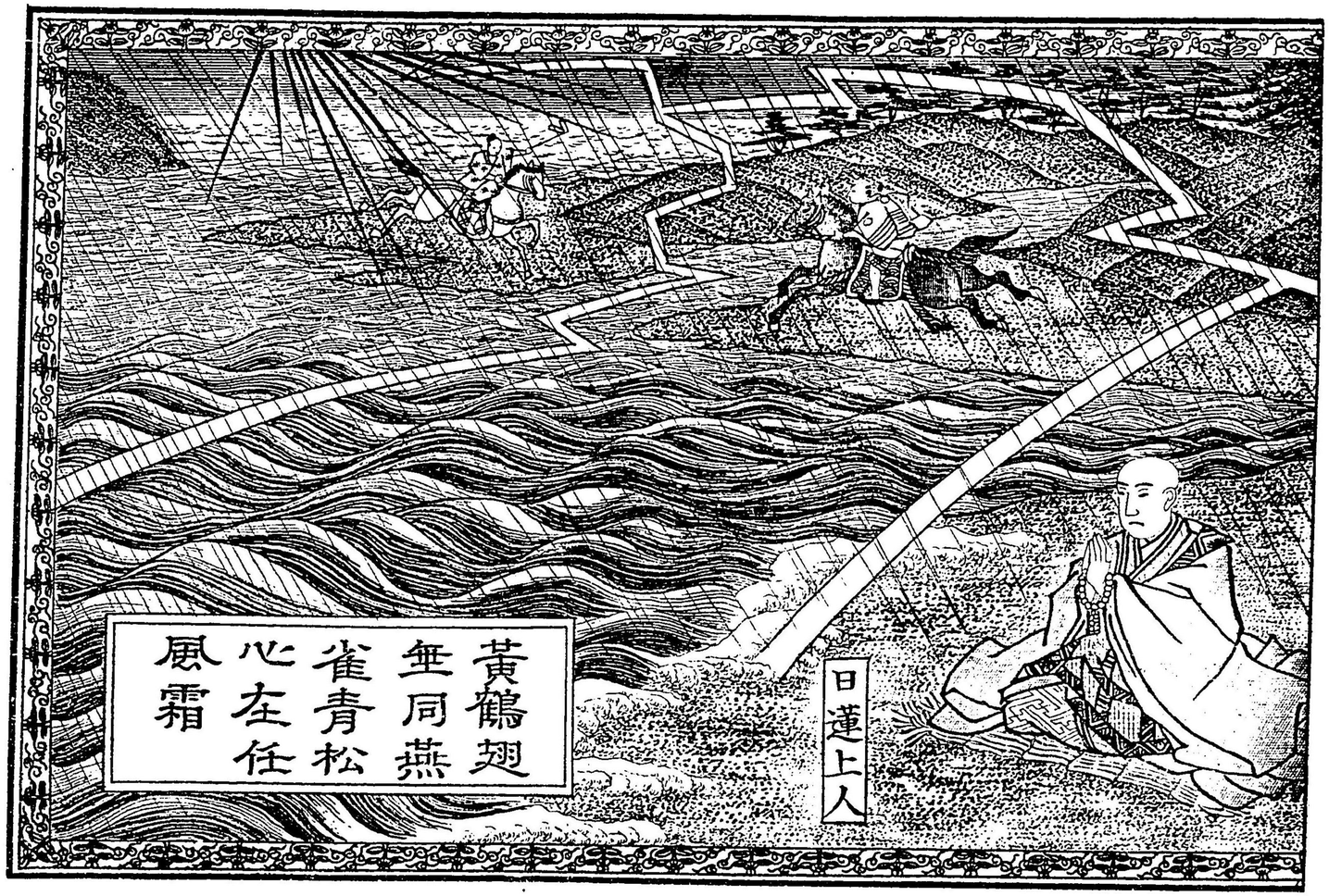
蓮五人

金壽堂梓

高祖日蓮上人

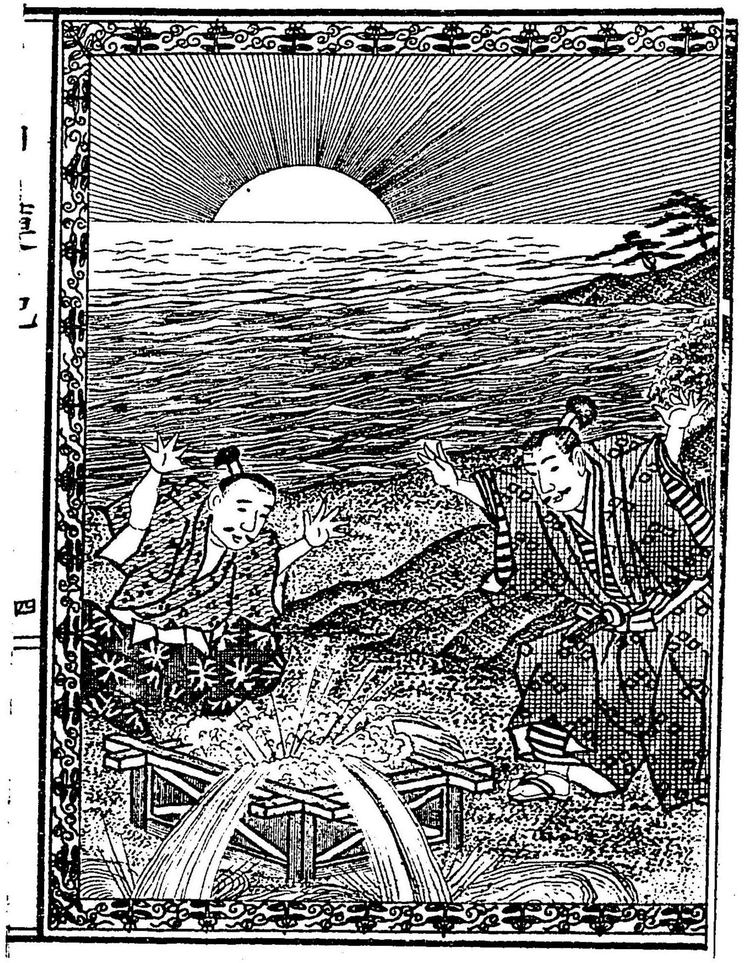

日蓮上人


依地直重
岩瀬大輔


黄鶴翅
無同燕
雀青松
心左任
風霜
日蓮上人

依地直重
岩瀬大輔

獄擁祥
雲各孕
靈天應
生甫又
生申



念仏無間禅天魔真言亡國律國賊他
宗隨地獄の根元法華一人の成仏南無妙
法蓮華経

と天
四海

と賞められる
宗祖日蓮上人の御父公と
称せるハ 桜三郎忠重とて聖
武帝の御末あり
御母ハ山嵜左
近の御娘●

日蓮

●老日輪と
拝しの人
事朝夕
怠る事
あるりしに
或夜の夢
日輪口
中に飛入
と見て
覚さり

夫より懐妊あり
月満貞應元年
二月十六日玉の
如き男子を

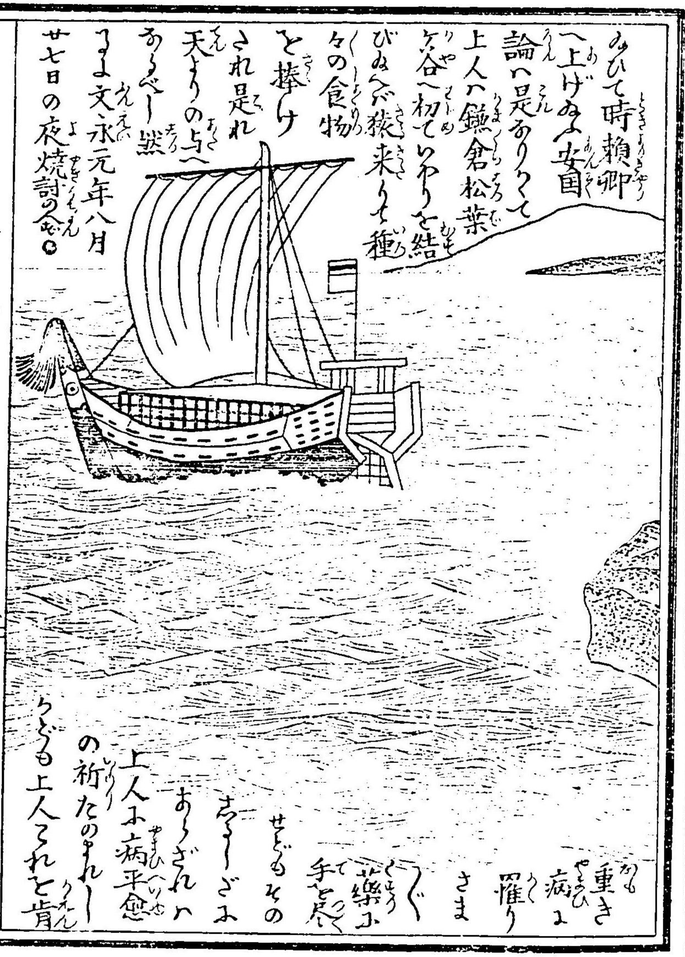
分境
其若輩
仏法を帰依しめひ生
長に隨ひ一と聞て万と知
る の御智すり
て仏
法諸宗
に通じめひ
遂に延應
元年十月八
日御年十八歳にして御
日蓮

剃髪有り自ら日蓮
と称せられ御修
業に御歳と重
ね建長五年三月
廿八日三十二才の折
旭に
向て初めて南無
妙法蓮華経の
七字と唱へ
給へ同内清澄の
諸方の地頭堂
長左エ門景信嘗て
集め念仏の法文と解

日蓮
信初め口を閉られ
ける其夜法業として
寺を出られ安房
の国より鎌倉
へ来り
国主を諫
め松葉谷に住ひ毎日
あまたの道ふ出題目を
唱へひける正元元年八月
廿三日戌の上刻大地震
あり夫より大旱ゑ打續
同二年八月一日大風雨
然水飢饉疫癘国

の災害止時あり
叔正元二年又
文應と
改さま
るゑ猶
も

災ひやまざれ
べくれと
上人
考へ
て願
文
一通認めて
若谷左ヱ門
入道に委細
の意趣を述
べ
数多来りけれ
ども御恙の
く遁れぬ
て孔御德厚
き故の
此花八日法
に遣され今
に
法花
とゝ
ありし
伊藤
文高ハ



みひて時頼卿
へ上げぬ〻安国
論ハ是ありて
上人ハ鎌倉松葉
ヶ谷へ初ていりを結
びぬ〻狩来りし種
々の食物
を捧げ
され是れ
天子りの与へ
あるべし然
るに文永元年八月
廿七日の夜焼討の
重き病に
罹り
さま
く
樂に
手を尽
せども
その
ありざるに
あるざれハ
上人に病平愈
の祈たのまれ
らども上人これを肯

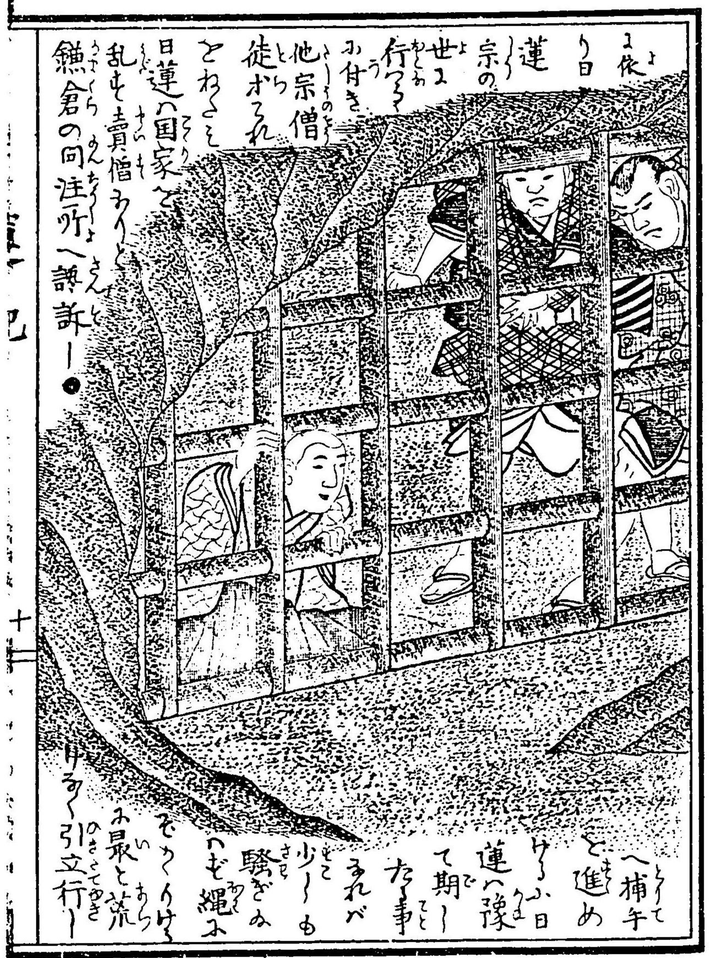
綾部正清
小山度命
あゝあゝ法華とこそ申へ
云々
上人
同名日乘と
あゝ法華經と

讀ゐへハ急ち病平癒せーとゐん
叔弘長元年上人御齢四十ゐゐ
此年五月十二日
伊豆國伊藤の浦へ流罪されけるゐ御弟子の數多ある中ゐ日朗ばかり御供願ーゐゐ
師弟の同船
切ゐとして終み纜とゐ
ゐゐ日朗大ゐゐけきーゐ
上人船の内ゐ宣みゐ

月の西に入るあゝべ日蓮伊豆にありと知れ日の東に出ると此鐮倉に日朗在と思ひありて終に船に出けるに扨

●こうければ執権に種々評議ありて終に日蓮を召捕べき評決松葉ヶ谷の庵室

その内日蓮上人の世宗旨を廣く施しめ小退々其仏徳を慕来る者多



に依り日蓮宗の世に行はれ他宗僧徒ぶれとわること日蓮は国家を乱す賣僧なりと鎌倉の向注所へ訴訴

へ捕手進めと日蓮は豫て期したる事なれば少しも驚ぎず縄に

そうりけ引立行

こゝでもあり斯て日蓮ハ縲絏のこゝろ〳〵めと受け龍の口ゝを死刑ゝ行ハんとて日朗ゝ六人と土の牢ゝ押込置其夜若宮ゝ至りそれより由井ヶ濱ゝ馬と駐めけるゝ何處の者とも知ざる老婆餅と盃ゝ載せ来最と悲しそ是と供せるゝ日蓮ハ辭れ給ひて心よく是を受させけるゝて龍の口ゝ至りけれハ依地直重形の如く坐と定め一刀引抜真向ゝ振かぶり打下さんとせしゝ怪むべし其太刀中程ゝ折れて飛ちり直重ハ仰天さまゝ倒れけるゝ此時東南ゝ當り光りありて恰も昼

の如くあるべき
獄卒どもハ
あるひかのき
或ハ走り或
ハ倒る
ありさま
他よ
き
有さまあり
此時ふ
あるう執権の
舘まも怪しき

日蓮しやの免の急使と龍の口へ遣
し罪を免しけるふ高祖ハ
袈裟を松みけ天を拝し
権護ふ報じ給ひけ
るて日蓮ハ龍の口
の刑難と進れ給
固の武士ゞと共
相模国越
後郡本
間
六郎左衛尉
重連が許へ
立越ゆ宗番

こと有て
霊空ふ声
あり過て道徳
の人を殺しゆゑ
国亡びんこと近
きまあり
国執権
大ひふ驚

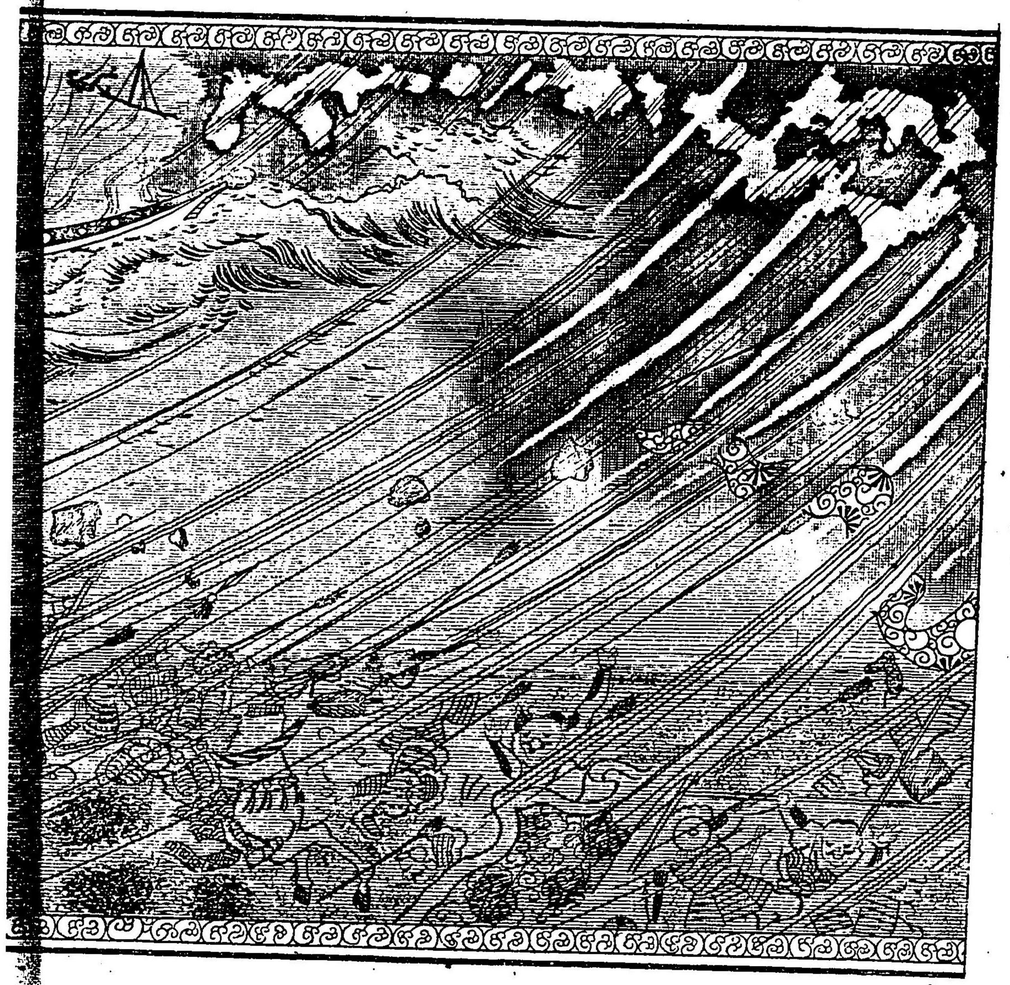
日蓮

兵ゞハ常
ふ日蓮を
くるしゆが昨夜
の奇異ハ
と見て
けるを恐
れ敬ひく
皆ての
教ふ復し
けり去る程ふ
官府
の命令ふ日蓮を佐

渡の國へ流さるべき旨達せらるゝに付日蓮八十月十日に船に乗組同廿二日越後国寺泊りに至り角田山の下に来るとき俄に烈風吹来りければ余義なく此の浦に碇泊する事に極り翌日八風も穏かなりけ出帆かゝ一日と経て覚由とふ呼ぶ船と附んせ〜又々風吹荒れへ矣ふ風待ちる海辺

ある大岩の上に日蓮上りて結縁の為とて題目と二編彫付置れしとや今ふ覚由の石題目とてこよなき旧跡あり とで

うち日に程ふ明れば風も治りければ船子どもハ艪びやう〜高く漕出三里乗出〜又〜一陣の颶風吹落碇りも綱も中く

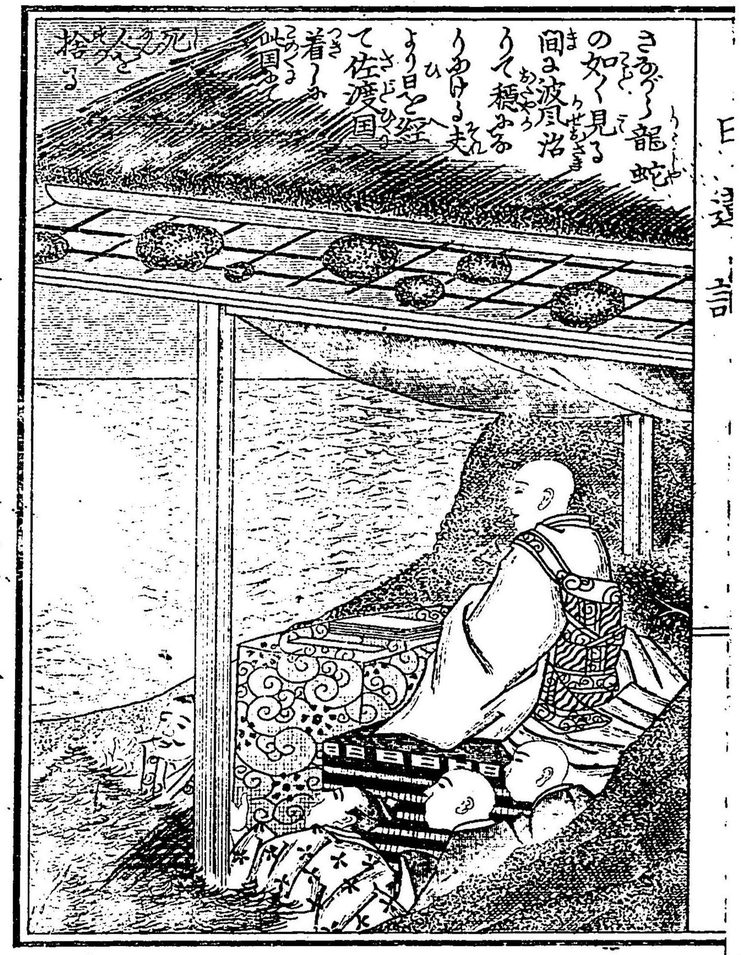


日蓮上人
巡志能
唯邪法
奇常心
人依是
頌德

日蓮上人

日蓮
様なる
れハ
人々ハ
船底ま
へさぐり
けるその
時日蓮
の掉取ぬひ波
の表さらと
題目
味噌
有

少しも恐るく
気色なく法華経計論
して
天ふ光有て金色の
る見へ
を着へ
衣と着へ
夾ゆる神声
命じるふ爰と動めよ
穏ゆるへ
怠るへ
凡ハ初めゆ十倍して
や船の覆らん有
の形波
浮
出


さゐぐ〜龍蛇の如く見る間に波風治まりて穏やかなり
あけ暮れ夫より日を経て佐渡国に着しかの国の人を拾ふ

野辺の傍らに一間四方の草庵を作り是に日蓮を押込めて少し恐れみのぬ蓑笠
寒国の雪中に凌ぎ鎌倉へ言越しあれば誰一人世話もするものもなかりけるなかに他宗の僧ばかり日蓮を憎みけるふ重

異言様鑓倉よりの添状もあれば
うろのこゝゝ為ゝ
法問とゝて責へしとて
僧徒数多集り種々
難題て問掛れども日蓮ハ
事ともしぬ只宿願
真言念仏とて一ゝ破毀
あゝ衆僧い誰一人解
破りしものなく只歯ぎしり
してくやゝゝ

文永十一年二月日
蓮御歳五十三才

△降積雪の春
より高きゝ修
業余念なし

戌年

此年三月八日日
朗ハ最先状と
持参ス

日蓮ゝ渡せハ
夫これ支度
調へ同月十五日
朝すぎよ佐
渡国と出立ス
ひ同月廿六日鎌倉へ

着の小夫り一所
と巡歴しゐる小甲府
ある小室山之修験
者小蓮ゐる此修験日蓮と
同谷の未石と空中へ祈り
上げし小日蓮
いつくり此石と祈り

下りたる小我法
ふ随ふべーとゐれ
けれハ修験珠数の
切れ程祈れるる
すも下る気色なきゑ上人
頓て珠数さらくとかー猛
く祈りめゝ此石難を逃
ふ落ーとで爰ふ髪
波木井の里の辻門
室ゑ一夜と明さんと上人旅の色
寄りゝり在ーゑ一人の老人腰
蓑と着ー上人の前ふ出言ゆ御僧
ヶ年跡御宿せー祈殺生禁断ゆ

石和川を鴉とゝひ御
僧の戒めを用ひ
ざる罪あり終に其
川に沈められたる事
小罪の重きに浮むせのあられハ何卒化と
授けあらてきめ〳〵と成て形ハ消うせ
上人取て懸てあひて石に字と書水中
に投めへハ亡者ハ再び現れ出で仏化と
得さりしを其後甲斐国萩居の
こゝつき此所の山に永く菴を
結ひ在せしが爰に又同国身
延山の麓村に毎夜十七八なる
村の若者等とそのゝ美女の遊行に同
ふや夜あ〳〵三四人ゞ何霊へ連行
思議ある事と思ひ其女こそ狐狸の類
ある人今宵来りあべ生捕んとて其用意

とあり
りてこると
知るや
知らずや
彼の女は悠然と
出来りいろ〻替らぬうち
くとそこらそこらと歩行
あるを夫と言さま追かけるに
身延山の分登り姿は見えず
あふけるに其夜より大風雨起り
昼夜の差別ありける斯る変事の
あるを事と豫て上人は知りぬひ其村
へ到り人々に告るに此度の凶変は全く

身延山の
連山の池に
住悪龍の
業あり決して神仏のいらせ
ぬ所の業あるに依て愚僧此
災を排ひ得させんとそ
村の人々に宣ふ
扨これは悪龍の
たたりあれは連山の池
の邊りに一社を建立
りの悪龍を神と崇め尊ぶべ
左此れは災幸とあり永く
當村冨榮ふるべし能く

心得よと
て登山と
をゆく
くて翌日
と待ちも
寄合て池
の邊りゑ
一社と走
けれハ日蓮
ハ昼夜この
所ゑ讀經
しゐゑ一人の
婦人現れ

やうはいらせゆひ
安国論を解ゆひて
我志ありて此国来
るより三七日の内
ゑ身とゞゞゞ
ゆくもありてが
臨終のせゑハ地
震して身と終
るべしそれとハス
てこれと知るべ
しと仰ありて
扨御遺言ゑ我
死骸ハ此山ゑ

しが日蓮讀
經の御声と
聞急ち童子
と変じ飛下り
ぬ是後ゑ七面神
と稱まるゆり夫より
村のうのハ上人と厚く
ゆくのしけるゑ習慣
治りしハ村中の喜び大方
なるまゝ猶幾年もと止り
うぐも聞入ゆるゆゑ身延山
の麓ゑ立出ゆひて池上
なる左エ門尉宗長の

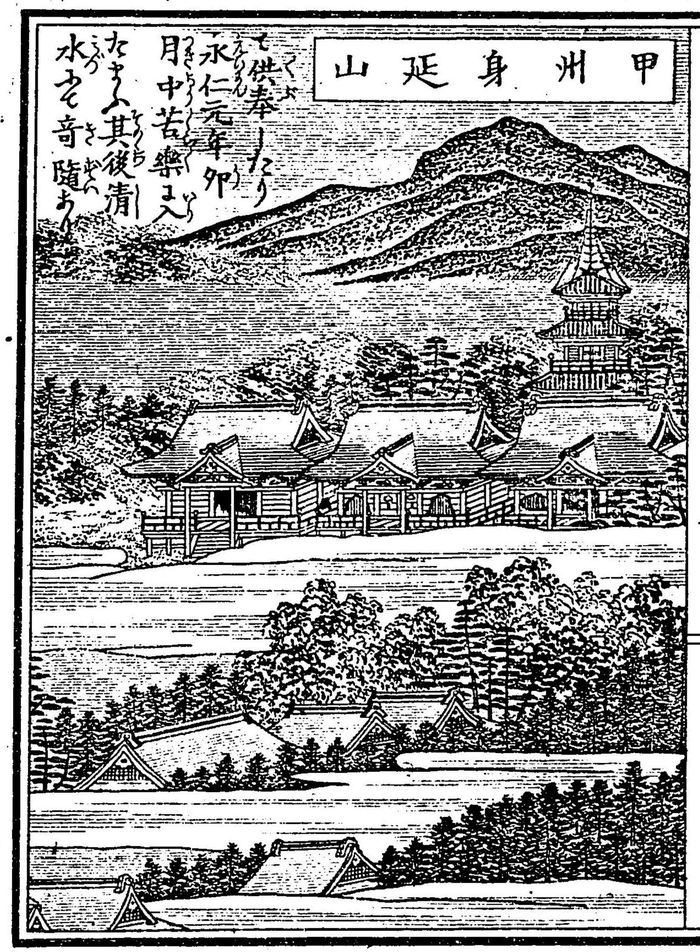
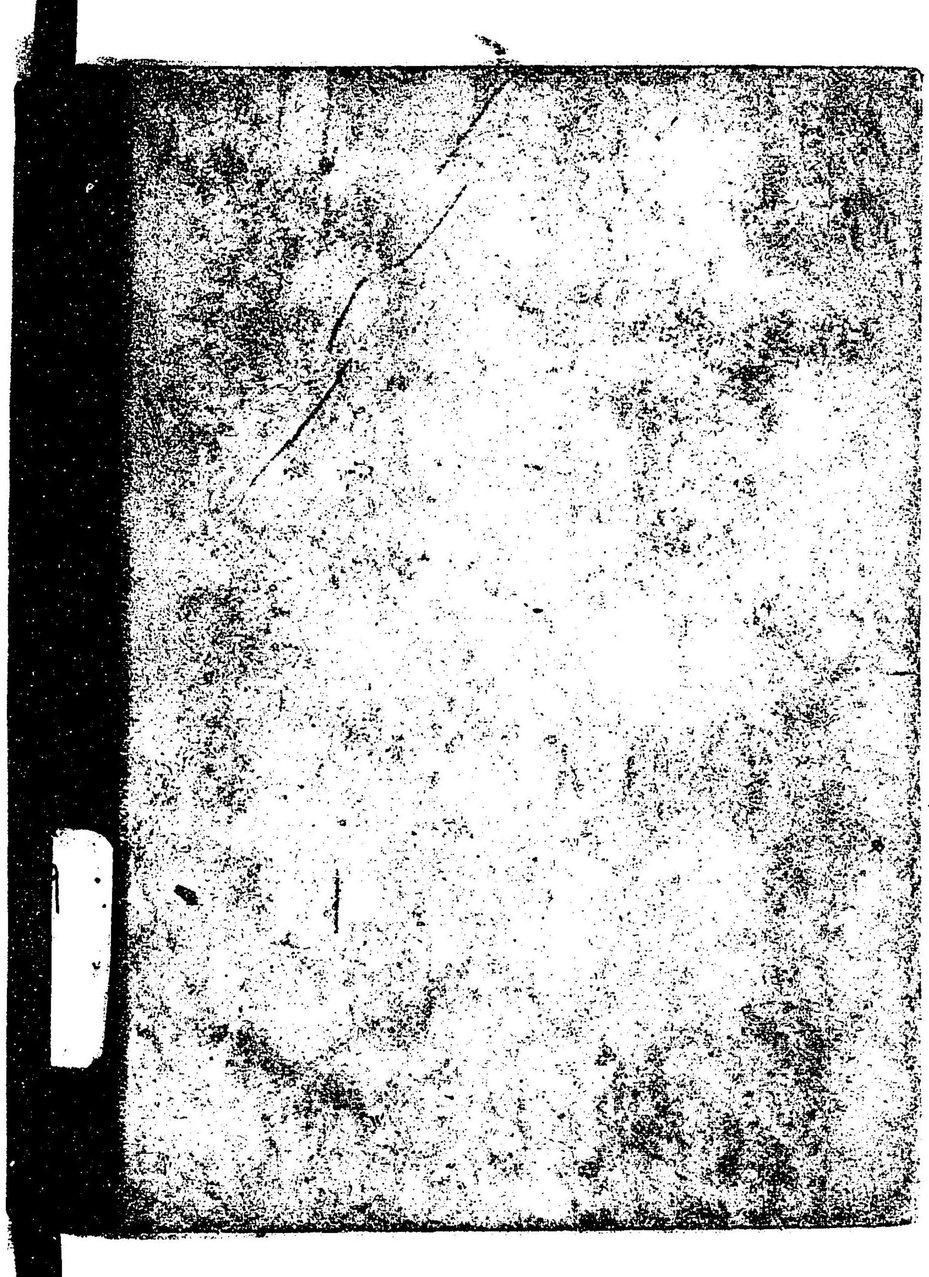
埋めて墓
と築しし
又

御遺物法華經は日証へ又立像の釋迦は日朗ふかくられ同日上人は日証あるじ日朗の御弟子二人と近くまゐりぬひいま両善ま御ゐりうへもくる人々只佛各ま御ゐりれとぞり

戌の刻日証日朗は御棺ふ手とりけさまやゝ仏式の經文を讀上げ頃て棺を皐出せり時の入道太田どの南條四條連松の保科足橋萩伊三郎左右と警固し舞楽を奏しける

あく居るゝ成仏なるゝ日証日朗入仏供養の声もきえ〳〵ま草葉のうゑふ置く露も梢の鳥も啼つれく〳〵ねれのまさりける

今也上の本門寺は是ありとゝろ〳〵屍と棺ふ納め翌四日


甲州身延山
て供奉したり
永仁元年卯
月中若樂上人
たゝ人其後清
水を音隨あり

同廿八日内裏東
の御門を誰唱
ふるも知れど
朝夕南無妙法
蓮華經と
聞へけるに依
り日々題目
と勸めさせた
りと名これより
市中の老若男女
題目ゝ〳〵とつ
けて唱へることゝ
なりぬる
明治十九年十一月二日御届
編輯人 下谷区竹町壱番地 永田文次郎
出版人 麹町区南元町壱番地 牧金之助